

## 楕型目打の継ぎ目不整

永吉 秀夫

1963～64年に発行された鳥シリーズのうち、最初の2集「るりかけす」と「らいちょう」をブロックで見ると、右写真のように楕型目打の継ぎ目が異様に詰まっていることがわかります。『日専』にはこの切手の目打は13.5と記されていますが、正確には縦横とも13.33となっています。

横方向については、目打穴20個分で20ミリ÷13.33×20=30ミリという計算式によって、切手の横寸となります。しかし同様の計算式で縦寸を計算すると、22個分で33.0ミリ、23個分で34.5ミリとなり、いずれによってもこの切手の縦寸34.0ミリと一致させることができません。

ところがそこで無理して23個の目打穴を配置したため、継ぎ目で写真のような寸詰まりが生じてしまったわけです。これではあまりに見苦しいということで、第3集の「きじばと」以降では新設計の針型(ピッチ13.53)によって、継ぎ目の不整合を解消しました。このような不整合は、昭和20年代のいくつかの記念切手の12ピッチ目打でも、「継ぎ目の間延び」という形で見られます。

この話を新刊の拙著の中に書いたところ、ある方から、同じ印刷局で製造された琉球切手にもそういう例があるよと教えていただきました。下の写真はC級品だからということでもいただいた民族舞踊2.5セント(英字入り)のブロックですが、横目打の継ぎ目で同様の寸詰まりが見られます。この切手の目打は通常13.5(正確には13.33)ですが、初期の一部に13×13.5という目打のものがあり、その分が皆こんな風になっています。耳紙への目打貫通様式にも違いがあります。古い切手で使っていた目打の針型を加工して流用したために、このようなことになったそうです。

この異様な目打は、同じシリーズの5セント、10セント切手にも見られます。また1セント切手には、シート構成が英字無しシリーズと同じ100面のものがあるそうです(英字入りは通常50面)。琉球切手もなかなか面白い収集対象ですが、今から集めるのはなかなか難しいでしょうね。

